

【Web掲載にあたってのおことわり】

- ・以下の報告書は実際に執筆／ご納品したものを下敷きにしています。
- ・伏字を多用しているのは作者／作品の特定を不可能にするためです。
 - ・作者ご本人から公開の許可をいただいています。

※前のページに戻る際にはブラウザの〈戻る〉ボタンをご利用ください。

作業報告書

(No. 0802**)

このたびはご利用ありがとうございました。

早速ですが、作品原稿に記入した文字の色分けについてご説明いたします。

赤字は「明白な誤字」。単純に修正していただければいいと思います。

鉛筆による書き込みは「誤りではないが修整が望ましい」という意図です。辞書などでご確認のうえ、どう処理するか作者ご自身で判断してください。また、「ここはひらがな表記のほうが適当」と思える漢字を丸囲み、「意味のとりにくい不確かな表現」と判断される部分に波傍線を入れました。

通常は「正字（＝新聞類がようやく採用を始めた本来の漢字／「頬」「啞然」「摑む」「嚙む」「顛末」「体軀」など）に」との指摘もしているのですが、今回は応募先の特質を考慮して鉛筆入れを避けました（頬でも頬でも選考結果への影響はまったくありません）。

また、通常用いる作業原則も「戦後出版業界表記原則」とでも呼ぶべきルール（「あて字・難読漢字の使用を避け、接続詞・基本代名詞・副詞はひらがなで」というもの）ですが、本作では作者の国語見識の高さが明らかだったため、特に違和感を誘われるもの以外は指摘しませんでした。

特にご説明が必要なのは「良」についてでしょうか。これは実にやっかいな語句で、一度漢字利用を許容してしまうと「良くあること」「〇〇しても良いですか？」などの原則から外れた違和感を誘う記述となってしまいます。今回は「基本的にひらがな。ただし『仲良し』『運良く』など熟語的扱いのものは漢字」という原則で指摘しました。

表記の不統一については、ワープロの「ツール」の中にある校正機能「表記揺れ」の実行をお勧めします。これらのプログラムは表記揺れ以外にも多用されている表現や言い回しのくせなどがある意味冷酷に指摘してくれる場合があるので、書き手の勇気が前提になりますが、有用な道具になりうると思います（表記の不統一に関してだけは、どう頑張ってもコンピュータにかないません）。

ちなみに、作家御用達という印象の『▲▲』は、品詞による漢字とひらがなの使い分けを考慮しておらず、事実上役に立ちません。例えば、「全員が一体になって」と「彼はいったい何者なんだ？」では、同じ「いったい」でも品詞が異なり、使い分けが必要になってきます。その点、●●の『◆◆』は、品詞ごとの用法に神経を使っていて有用と思います。辞書それぞれの特徴（正確には編纂者の能力）には、われわれが思う以上に大きな違いがあるようです。

【以上が校正作業についてのご説明で、これ以降は一校正者の任からいささか外れた編集面の感想となります。気をつけてはおりますが、あるいは「押しつけがましい」と感じられてしまう部分があるかもしれませんので、ご不要の部分はさっと読み飛ばすくらいにしてください】

●記述面について

☐文法精度が確保された安定感のある日本語です

- ・ところどころに品詞の重複、主語と述語の不整合、能動態と受動態の混在、文意の飛躍／断絶などが見られます

まったく問題ありませんし、表記の部分からも高い国語見識が窺えます。また、違和感を誘われる読点利用が見られないのは、作者が十分な構文／品詞解析力をお持ちだからだと思います。

※「” を “ に」と赤字を入れているのは“ ”が日本語の記号ではないから”です。ワープロの置換機能を用いると簡単に修正できます。

●人称面について

- ・「セリフの味」「地の文の声」とともに実現された真性三人称小説です
- ・「客観的に書こう」という意図が窺える記述も見られますが、「自由間接話法（＝地の文における独白）の多用」＋「地の文の主観、すなわち記述者の視点が作中当事者となっている記述も目立つ」＋「地の文において『声』を持つに至らない説明のための説明が多くおこなわれている」という理由で、「疑似から真性への過渡期にある混合人称」と考えられます

- 地の文が基本的に作中当事者の主観で書かれており、また、それが作者の意図だと考えられることから、疑似三人称作品と判断できます
- ・他者への目配りのできた、きちんとした一人称作品です
 - ・「他者への関心・洞察の不足（＝事実上の欠落）」が特徴的で、初心者と女性応募者に目立つ「自分語り一人称」と言えそうです
 - ・「描写の不足（＝事実上の欠落）」＋「地の文のほぼすべてが『説明のための説明』である」という理由で、「初心者によく見られるあらすじ文体一／三人称」と感じられます

付け加えるとすれば「疑似三人称（＝実質一人称）の利点を生かした、痛快な文体」でしょうか。「一人称化も可能だが、そうすると主人公自身の表情を描きにくくなる」というデメリットを理解されたうえでの疑似三人称なのだと感じました。

※P△で「笑ってみせた → 笑いを見せた」と鉛筆出ししているのは、「彼女が意図的に笑ったのかどうか主人公には断定できないから」です。この「～してみせた」はどういうわけか（「胡乱」とともに）ラノベにおける常套句で——ラノベへの苦行にも似たルビ振りを主たる収入源にしていたことがあるのですね——避けたほうがいいように思います。ただ、「第三者にも故意であることが明らか」という局面もあり、P△で○が□した部分は指摘していません。

●会話（＝セリフ）について

- 読者を思わずにやっとなせせる、あるいは笑わせるような、魅力あるセリフが多いです
- キャラ表現の機能も備えた「生きた会話体」になっています
- ・会話に「進行上必要な最低限の段取り＋地の文の連続を避けるためのワンポイント」以上の役割が与えられていないようです
 - ・会話の多くが独り言となっており、「読者を引き込めるだけの生きたやりとり」が実現できていないようです

上の2つを両方とも四角囲みできたのは、実は本作が初めて、作業しながら爆笑を誘われたのも、これまた初の出来事です（快挙でございます）。

要するにセンスということになるのですが、実に楽しく読み進むことができました（特に□たちが出てくるあたりが気に入りました）。

※後半の圧倒的おもしろさに相殺されて問題にはなりません、冒頭部分の（△との）「○○」うんぬんのやりとりはいくぶんの作為性（ま、わざとらしさですね）も感じさせ、少し抑えたほうがいいかもしれません。その後十分すぎるほどにアピールできていますので、この時点であせる必要はないと思います。

※□□に「△△」とルビなど振るべきではありませんが、ただ、作中の当事者たちが「△△」という発音を即座に□□と関連づけられるのかとの疑問も残ります。ルビ以外の形での手当てをお勧めいたします。

●キャラクター設定について

□●多くの読者が魅力的と感じるに違いないキャラが造形できています

- ・主人公が積極性に欠ける印象で、物語の牽引役をうまく果たせていないようです
- ・主人公の人格／性格が表現されていないようです

きちんとしたキャラ設定（内面と言葉）が与えられていると、「作中に嫌な奴がひとりもない＝全員を好きになれる」という現象が生じるのですね。「この調子で！」以外のことをお伝えする必要を感じません。

●描写の有効性について

- ・読者に「ほう！」と思わず膝を打たせるような生き生きした描写が実現できています
- ・描写の必要性自体は理解されていると感じられますが、少々凝りすぎと思える表現や美文調記述が目立ち、読者の心には届きにくいようです
- ・情景についての描写（＝場面設定／場面演出）が足りないようです
- ・人物描写が不足しているようです

無印なのは「いちばん上に三角」との意図で、本作では地の文での主人公の口調とセリフの味が前面に出ているため描写そのものが目立ちにくくなっていると感じられるのが根拠です。

ただ、これは「描写がおろそかになっている」という意味ではありません。単なる△ではなく「□□の△」とするあたりからも「見て書く」姿勢は明らかで、□への第一印象に関する記述も記憶に残ります。

あえてお伝えするとすれば「○と△の描き分けをもう少し」でしょうか。それぞれの

□のどこか一点（表情やしぐさ、あるいは体形など）をすばっと描いてみせるのが効果的です。特にヒロインの○については、「なにかのはずみのエロい描写」を含めてもいいのではないかと感じました。

いずれにせよ、本作のセリフは描写の機能を十分に果たしており、それを含めて考えれば「三角などではなく二重丸」となります。

●説明（解説）の提示法について

- ・「声」を持った地の文の流れの中で、それと気づかせずに説明が提示されています
- ・物語記述を分断してしまう、かなり無造作／無自覚な説明提示と感じられます

『それと気づかせずに』はたぶん意図されていない」と感じられるため、この項目も「上に三角」といたしました。が、本作は地の文・セリフ双方が十分な表情を持っており、多くの応募作に見られる「場面記述と解説の混在が読者に強いる晦渋」からは無縁と言えます。

一般論の再確認としては、やはり「場面記述と（作品の世界観／主人公の出自／現在に関係してくる過去の出来事などの）解説を混在させてはいけない」が挙げられます。

例えば作品の冒頭では「主人公の主観を通した作品世界設定の提示で主人公自身のキャラ立てをする」、もしくは「尋常でない事態に主人公がどう対処／解決するかで主人公のキャラ立てをする」のどちらかを選択すべきで、「実は重要でない場面をだらだらと進行させながら強引な回想を繰り返して解説を（無自覚に）強行する」は、文字通り「自動的に1次落選」の典型となります。

そんな観点から本作の冒頭を眺めてみても「混在していないのでOK」と言えますし、この時点で「○に△△とは……」と解説せずに踏みとどまったのもまさに正解なのですが、一方で「冒頭のブロックをもう少し長く、すなわち『小説的時間』の経過が実感できるくらいの分量を持ったものにして、そこで主人公+○のキャラ立てをさらに丁寧にこなしてもいい」との指摘も成立します。

これは悩みどころで、作業中にも「こちらがいい」との確信はありません。全体の分量から見ても、現状そうであるようにヒロイン・○を冒頭部分に登場させておくのが有効、また、1行空けを挟んだP△の終わりまでを「最初のブロック」と捉えれば、分量的にも十分となります。ここは「こういう考え方もあります」とだけお伝えするのがいいのかもしれませんが。

●構成／文体面について

- ・吟味された巧みなストーリー展開と感じられます
- ・読者に違和感を与えてしまうと思える要素が散見します

ここも「上に三角」で、文体面では「小説としての要件を満たした、立派な小説です」と断言できます。

一方、構成の観点からは、「なるほど、作者が『ご都合主義』と心配されるのもわかる。『△』も、『□□』もいささか強引なものなあ」と感じます。

無責任な言い方になりますが、これについては開き直るしかないのではないのでしょうか。再三述べているとおり、本作の文体の魅力は際立っており、応募作に要求されるのが「完成度よりも書き手の資質／将来性」だとすれば、現状でもその目的は十分に達成されているわけですから。

仮に「△」が不自然にならないよう作品の世界設定自体を——ラノベの多くがそうであるように——現実とは位相の異なるものにすると、今度は「現実世界での風俗を土台にした地の文の魅力」が削がれる（書きにくくなる）ことになります。

また、「この『△』は暗喩で、作者の意図は現実にある（□□）差別なのだなあ」と思わせる書き方も可能ですが、それは○で意味を持つテーマで、本作の▽を考えると明らかにオーバー・クオリティー（これは△△社の編集者への侮辱でもありますが）となります。

唯一ご提案できるのは「『△』に関する□を敢行して読者を煙に巻く」でしょうか。それをある意味執拗に、そして珍妙におこなうと、現状の諸要素を傷つけることなくさらなる笑いを引き出せるかもしれません。なにより、「豊かな言葉で大嘘を言い張る」のが小説の醍醐味で、「表層はお調子者だが人間としての優しさ・モラルを備えた主人公による読者の共感を誘う主體的行動」という本作の骨格がもたらす魅力は多少の問題を霧散させてしまいます。実際、当初は「△かあ……」と首をかしげはしましたが、途中から気にならなくなり、予定調和とも言える「□□」についても「明らかな瑕疵」とは感じませんでした。

本作からは『▲▲』に似た「地の文の切れとセリフの味＝書き手が備える本質的な頭のよさ」を感じます。「ライバルの出来映えがどうであれ十分にたたかえる」と確信するしだいです。

※「改善の余地」として「章分けの導入」をお勧めします。○枚の分量であれば全体を●～●章に分けるのが定石、それぞれの冒頭に1、2と番号を振ってみてください。

※タイトルの『○○』、これについては正直「うーん……」と感じます。▽ともかぶりますし、再考をお勧めいたします。

※要項の規定が「40字×30行で▲枚程度まで」となっていますが、これは「印字体裁根拠で」という意味なのかもしれません、その場合は○枚を超えた時点で失格の危険が生じることになります（現状は要項と同じ印字体裁で□枚あります）。一度編集部に電話して「400字詰め換算枚数の算出方法」を確認したほうがいいかもしれません（○○なので、堂々と質問してください）。

最後に、ホームページと一部重複しますが、人称原則についてどう定義しているかをご説明いたします。「作者の立ち位置」という観点から、当オフィスは「3つある」と認識しています。

————以下省略————